第16回「ぼくとわたしのリサイクル」作文コンクール



リサイクルのバトン

四年　貞平　和磨

みなさんは、自動はん売機の横に置かれているリサイクルボックスに、飲み終わったペットボトルをすてたことはありますか。このボックスは、ごみ箱とはちがい、リサイクルの入り口なのです。ぼくは、サントリービバレッジソリューションのリサイクル工場の見学をして初めて知りました。

こちらの工場では、東京、埼玉、千葉のリサイクルボックスで集められたペットボトルがかん、ビンが1日約二十トンも集まります。そして、その量を数日以内に分別して、次の工場に出します。

ぼくがすごいと感動したのは、分別に科学がたくさん使われていたことと、すごいしょく員さんがたくさんいたことです。科学の力としては、風力とじ力の働きを利用します。

風力は、重さのちがいを使って、軽いペットボトルを風でふき飛ばしていました。

じ力は、じしゃくにつくてつのせいしつを使って、アルミかんとスチールかんを分けていました。スチールかんがベルトコンベアの上部に引きこまれる様子は、ブラックホールにすいこまれるようで面白かったです。

そして、科学にも負けない力は、人間です。

科学の力で分けても、正しく分けられないものがあります。それは、たばこのすいがら、リチウム電池、飲み残しが入ったままのペットボトルです。ぼくは、こんなものをリサイクルボックスに入れる人がいることにびっくりしました。電子タバコやスプレーかんがまじっていることもあるそうです。これらは、落ちたりつぶしたりすると、熱や火が出るので大変きけんです。しょく員さんは、流れてくるものの中から、しゅん時にい物を見つけて取り出していました。ぼくもやってみましたが、流れが速くてできませんでした。目もすぐにつかれました。い物の中には、ほう丁やわれ物があり、ケガをしそうになったり、

飲みのこしのにおいにこまることもあるそうです。

ぼくは、今後、リサイクルボックスを使う時には、今回の工場見学のことを思い出して、飲み切った空のものを入れることや、リサイクルできないものを入れないことを守っていこうと思います。しょく員さんは、自分がケガするかもしれないのに、ていねいに分別してくれています。そのおかげで、ぼくらが出したしげんは、次の工場へバトンのようにつながれていきます。でも、そのバトンのスタートは、ぼくらが正しく分別するところから始まります。工場見学の人が言っていた「分ければしげん、まぜればゴミ」という言葉のとおり、ぼくらが安全なバトンをしっかりわたせば、すごいしょく員さんも守られます。

これからは、ぼくもリサイクルのバトンを大切にして、家族やまわりの友達にも分別の大切さを伝えていきたいです。